(SOAS) へ行き、家族とともに1年5カ月をロンドンで過ごした。この間、同学部で日本の古典籍に関する研究会が開催された。これに細谷氏が参加された。大会中、細谷氏を同学部の図書館に案内した。この図書館の日本語図書は充実していて、日本の地方大学の図書館以上といわれている。ついつい時間をすごしてしまい、研究会の会場に戻ったところ、聞きたかったY氏のホーレー文庫に関する報告は終わっていたことがあった。

経済資料協議会の解散に想う

程島俊介
(元中央大学)

中央大学経済研究所は1978年5月の名古屋学院大学における総会において加盟を認められてから今日まで30年のお付き合いとなりますが、私個人は、78年から94年までの16年間お世話になりました。その間、「経済学文献季報」のロシヤ語採録、「経済資料研究」の編集や協議会の運営のお手伝いをさせていただきました。

その経済資料協議会が2008年10月に解散と聞き、ショックでもあり、残念でもあり、時代の転換をあらためて想う次第です。とりわけ、「経済資料協議会50年史」を読み返してみると、1951年に生まれてから今日までの経済資料協議会は、日本の経済学会およびドキュメンテーション界における人材の宝庫であり、中枢としての機能を果たしてきたことを改めて確認するとともに、分厚い生きた経済学辞典でもありました。

そのことを鑑みると、自分の果たしてきた役割の何とちっぽけなことであったか、忸怩たる思いでありますが、一方、経済資料協議会の輝かしい歴史の1ページに携わることができたことは大変光栄でもあ

りました。

協議会の仕事に関わったことが契機で、専門図書館協議会や国連寄託図書館会議等の分野で仕事をすることになり、多くの図書館人との交流が出来たのは幸いでした。

図書館や研究所の仕事を離れて、大学院や学長室の仕事に移ってからは、直接協議会の仕事に関わることなく今日を迎えておりますが、情報の収集や分析において、その当時の手法が活きていることを実感しています。

現在は、大学を定年退職後、設立に深く関わった「社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩」という大学を中心としたコンソーシアム組織で、多摩地域の教育を核としたまちづくりの事業に関わっております。

経済資料協議会の思い出

今　野　茂　代
(小樽商科大学ビジネス創造センター)

私が経済資料協議会（以下「経資協」）と初めて接したのは、小樽商科大学経済研究所に入った1984年です。文学部出身で、経済の「け」の字も分からず右往左往しながら24年間。経済研究所資料部主任でいらした長谷川仲三先生、また多くの経資協の皆様のご指導をいただきながら、経資協に係わってきました。前半は採録機関としての仕事のみでしたが、1998年から季報編集サブセンター、2000年からは理事機関を務めさせていただきました。最後は理事機関として組織改革検討委員会のメンバーにもなりましたが、結局のところ経資協の存続はかなわず、大変残念にまた申し訳なく思っております。

何故、経資協が存続することができなかったのか。図書館や研究機